

主の顕栄祭（変容祭） 8月6日/19日

晩 課

首唱聖詠、大連禱、カフィズマ（悪人の謀、小連禱）に続いて

祭-1

▽祭日経 P744

「主よ、爾によぶ」八句を立てて讃頌四章を歌ふ、各二次。第四調。（修士コスマの作）。

① ②
主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主やわれ
③
に聞きたまえ 主やなんじに呼ぶすみやかに我れにいたり
④
たまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え
終 ①
主やわれに聞きたま え ねがわくは我が祈りは香炉の香りの
② ③
ごとく汝がかんばせの_て前にのぼりわが_テ手をあぐるはくれ
終
の祭のごとくいれられん 主やわれに聞きたま え

（句）主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

主よ、爾の十字架の先に、爾が変容して、父より證せらるる時、山は天に似、雲は幕の如く張れり。ペトルはイアコフ及びイオアンと偕に彼處に在りき、爾の賣らるる時にも爾と偕に在らんとするに因る、爾の奇蹟を見て、爾の苦を畏れざらん為なり。爾の大なる恵に因りて、我等に平安にして此の苦に伏拝するを得しめ給へ。

（句）願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

（句）主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前

に敬まん為なり。

主よ、爾の十字架の先に、爾は門徒を高き山に攜へ、彼等の前に容を変へて、有能の光線にて彼等を照し給へり、一は仁愛を以て、一は権能を以て復活の光明を示さんと欲せしに因る。神よ、我等にも平安にして之を獲しめ給へ、爾は仁慈にして人を愛する主なればなり。

(句) 主を望み、我が霊主を望み、彼の言を待む。

(句) 我が霊主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、爾の足の立ちし山、嘗て冥くして烟りたる者は、今尊くして聖なり、蓋爾の畏るべき変容は世のなき先より隠れたる秘密を遂にペトル、イオアン、イアコフに顕せり。彼等は斯くの如き爾の面の光及び爾の衣の耀に勝へずして、懼れて地に俯伏し、且駭き異しみて、モイセイ及びイリヤが爾に成らんとする事を爾と語れるを見たり。又父より出づる声は證して云へり、此は私の至愛の子、我が喜べる者なり、彼に聴け、彼は世界に大なる憐を賜ふ。

(句) 願はくはイスラエリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイスラエリを其の悉くの不法より贖はん。

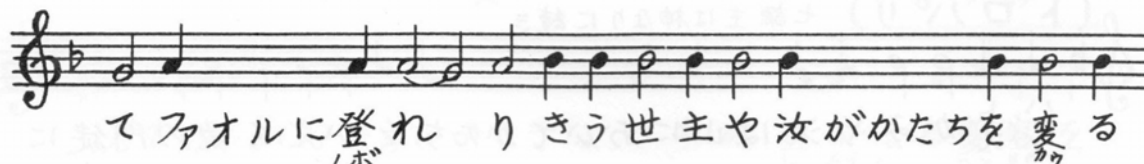
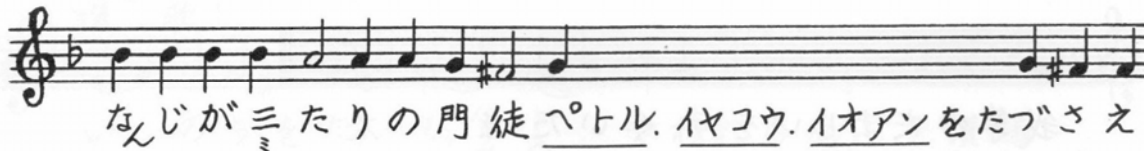
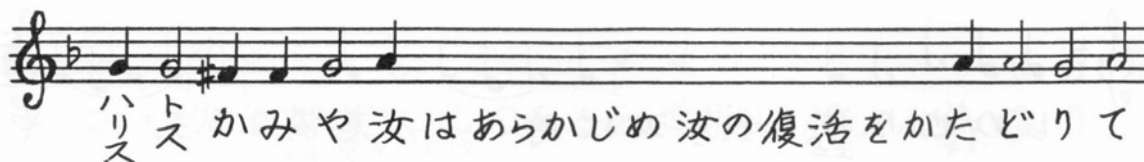
(句) 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

救世主は首たる門徒を攜へ、高き山に変容して、光明に彼等を輝かし、此を以て諸徳に秀でたる者は神聖なる光榮を獲んことを顕し給へり。ハリストスと語れるモイセイ及びイリヤは其生死者の司たるを示し、又彼が昔律法と預言者とを以て語りし神なるを示せり。父の声も彼の為に光れる雲より證して曰へり、彼に聴け、彼は十字架にて地獄を囚にし、死者に永遠の生命を賜ふ者なり。

(句) 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

♪光榮、今も、第六調。(アナトリイの作)。(楽譜は下↓)

ハリストス神よ、爾は預め爾の復活を像りて、爾の三人の門徒ペトル、イアコフ、イオアンを攜へて、ファウォルに登り給へり、救世主よ、爾が容を変ふる時、ファウォルの山は光にて蓋はれたり。言よ、爾の門徒は見る可からざる容を覩るに堪へずして、地に俯伏し、天使等は畏れ慄きて奉事し、天は戦ひ、地は慄けり、光榮の主を地に見たればなり。





→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る)

(ポロキメンの後)

祭-2

パレミヤ (旧約聖書の読み) ▽祭日経 P746

【エギプトを出づる記の読み】(24章)。

主はモイセイに謂えり、爾山に我の許に登りて、彼處に立て、我爾に石版、律法及び誠命、我の彼等を教えん為に書しし者を與えん。モイセイ及び其の従者イイススは起ちて上山に登れり。モイセイ長老等に謂えり、此處に止まりて、我等が爾等に返るを待て、視よ、アアロン及びオル爾等と偕に在り、若し人に訟事あらば、彼等に至るべし。モイセイ山に登りたれば、雲山を蔽えり。神の光榮シナイ山に降り、雲之を蔽えること六日なり、七日に至りて、主は雲の中よりモイセイを呼べり。主の光榮の状はイズライリの諸子の目前に在りて、山の巔に焚ゆる火の如くなりき。モイセイ雲の中に入り、山に登りて、四十日四十夜彼處に山に居たり。

【エギプトを出づる記の読み】(33、34章)。

主はモイセイと面を合わせて語りしこと、人がその友と語れる如し、後彼積されて營に返り、其の侍者、ナワインの子イイスス、少き者は幕を離れざりき。モイセイ主に謂えり、視よ、爾我に謂う、斯の民を導き上れ、然るに誰をか我と偕に遣わさんを未だ我に示さざりき。爾嘗て我に謂えり、我衆よりも爾を識る、爾我の前に恵みを獲たりと、若し爾の前に恵みを獲たらば、求む、己を我に示せ、我が明らかに爾を見ん為、爾の前に恵みを獲たる者として在らん為、亦此の大いなる族の爾の民なるを知らん為なり。

主彼に謂えり、爾親ら爾の前に往き、爾を平安ならしめん。モイセイ彼に謂えり、爾若し我等と偕に往かずば、我等を此処より出だす母れ。我及び爾の民が爾の恵みを獲たることは、如何にして誠に知るを得べきか、爾が我等と偕に往くを以てするに非ずや、然からば我及び爾の民は凡そ地に在る諸民に超えて光栄を獲ん。主はモイセイに謂えり、爾が言いし此の事をも我行わん、蓋爾は我の前に恵みを獲たり、我衆よりも爾を識る。モイセイ曰えり、求む、爾の光栄を我に示せ。主曰えり、我我が光栄を爾の前に過ぎしめ、主の名を爾の前に宣べん。我恵まんとする者を恵み、憐れまんとする者を憐れむ、又曰えり、爾は我が面を觀ること能わず、蓋人我が面を觀て、猶生くるを得ず。主曰えり、視よ、我に此の所あり、爾此の磐の上に立て、我が光栄の過ぐる時、我爾を磐の穴に置き、我が過ぎ去るまで、手を以て爾を蔽わん、我が手を除く時は、爾我が後を視ん、我が面は爾に現れざらん。モイセイ夙に興きて、主の彼に命ぜし如くシナイ山に登れり、モイセイ彼處に彼の前に立ちて、主の名を呼べり。主は其の面前を過ぎて、宣べて曰えり、主神は洪恩にして慈憐、寛忍にして至仁、且眞實なる者なり。モイセイ直に地に俯伏して主を拝せり。

【列王紀第三卷の読。】(19章)。

彼の日イリヤはイウダの地なるワイルサワイヤに至り、其の僕を彼處に遣して、自ら曠野に入りしこと一日程、杜松樹の下に偃して、杜松樹の下に寐ねたり。視よ、神の使彼に捫りて曰えり、起きて食らい飲め。イリヤ目を注ぎて、其の首の側に大麦の餅と一瓶の水あるを見たり。彼起きて食らい飲みて、復寐ねたり。主の使再び来たりて、彼に捫りて曰えり、起きて食らい飲め、蓋爾の前に遠き途あり。彼起きて食らい飲み、其の食の力に依りて四十日四十夜行きて、神の山ホリフに至れり。彼處に彼一の洞に入りて宿れり。視よ、主の言彼に臨みて、主彼に謂えり、出でて、主の前に山の上に立て、視よ、主は過ぎ行かん、主の前に當りて、大いなる強き風、山を裂き、巖を砕く者ありしが、風の中には主在らず、風の後に地震ありしが、地震の中には主在らず、地震の後に火ありしが、火の中には主在らず、火の後に微かなる風の声在りしが、彼處には主在り。イリヤ之を聞きて、上着を以て其の面を覆い、出でて洞の側に立てるに、主彼に謂えり、往きて爾の途に返り、曠野を経てダマスクに至り、アザイルに膏を沃ぎて、預言者と為せ、

→通常部分 P10 重連禱へ戻る

(増連禱が終わったら)

祭-3

リティヤのスティヒラ

▽祭日経 P749

第二調。



<以下同様に歌ってもよい>

ファウォル山に於て／光栄の中に變容して、／爾の門徒に／爾が神性の光栄を顕ししハリストス神よ、／我等をも爾を識る智識の光にて照して、／爾の誠の路を履ましめ給へ、／爾は獨仁慈にして人を愛する主なればなり。／

日の先より在す光なるハリストスは、肉體を以て地に住める時、十字架の前に凡そ其威嚴なる摂理に属する事を神に適ふが如く行ひて、今日ファウォル山に於て奥密に聖三者の像を現す。蓋三人の選ばれたる門徒ペトル、イアコフ、イオアン獨を攜へて此に登り、僅に其受けたる肉體を隠し、彼等の前に變容して、本性の華麗を顕せり、然るに尚全からず、此れ彼等を確信せしめ、亦彼等を愛護するに因りてなり、恐らくは見るて偕に生命を喪はん、乃其肉體の目の勝ふる力に稱へて之を為せり。又預言者の首たるモイセイ及びイリヤを攜へて、確に其神なる事、其父の性の眞の光、生死者を掌る者なるを證するを致せり。故に雲も幕の如く彼等を覆ひ、且雲より父の声朗に證して云へり、此は我が黎明の前に腹より生みたる至愛の子、我が遣しし、父と子と聖神[°]の名に因りて洗を受けて、神性の権柄は分離なくして惟一なりと確に承け認むる人々を救はしむる者なり、彼に聴けと。人を愛するハリストス神よ、爾親ら我等をも爾の近づき難き光栄の光にて照して、爾の終なき國の嗣と為るに堪ふる者と為し給へ、爾至仁なるに因る。

光栄、第五調。

来りて主の山に登り、我が神の家に入りて、其變容の光栄を見ん、父の獨生子の如き光栄なり。来りて光に由りて光を受け、神[°] 挙げられて、一體の三者を世々に歌はん。

今も、同調。

ハリストスよ、神を見しモイセイ、及び火の車に乗り、焚かれずして天に往きしイリヤは、爾を變容の時に雲の中に覩て、爾が律法及び諸預言者の立定者又實行者なるを證せり。主宰よ、彼等と偕に我等をも爾の光照に勝へさせ給へ、世々に爾を歌はん為なり。

→通常部分へ戻る。 P11 リティヤへ

(リティヤが終わったら)

祭-4

挿句のスティヒラ

第一調。▽祭日経 P751

<誦経、または1調で歌ってもよい>

昔シナイ山に於て表徴を以てモイセイと語りて、我は永在者なりと言ひし者は、己の内に人の性を受けて、今日ファウォル山に門徒の前に変容して、其本性の華麗を顕し、モイセイ及びイリヤを此くの如き恩寵の證者に立てて、樂に與る者と為し、十字架に因りて救を施す光榮の復活を預め示す者と為し給へり。

句、天は爾に属し、地も爾に属す。

神の先祖ダウィドは神[°]にて爾獨生子が肉體を以て人々に來るを預見し、遠くより造物を歡樂に召して、預言して呼ぶ、ファウォルとエルモンとは爾の名に因りて欣ばんと。蓋救世主よ、爾は門徒と偕に此の山に登り、変容して、アダムの味みたる性を爾が神性の光榮と光明とに易へて、復輝く者と為し給へり。故に我等爾に呼ぶ、萬有の造成者、主よ、光榮は爾に歸す。

句、ファウォルとエルモンとは爾の名に因りて欣ぶ。

無原なるハリストスよ、使徒の中の選ばれたる者は変容の山に爾が光の勝へ難く、神の性の近づき難氣を見て、神聖なる驚奇に心を奪はれ、且輝ける雲に照されて、父の声を聞けり、是れ爾が人と為りしことの奥密、即人體を取りて後にも爾が獨生の子、及び世界の救者なるを確證する声なり。

光榮、今も、第六調。

主よ、爾は今日爾の選ばれたる門徒ペトル、イアコフ、イオアンに、ファウォル山に於て、爾の神聖なる容の光榮を示せり。蓋彼等は爾の衣の光の如く輝き、爾の面の日より勝れるを見て、爾の光明の勝へ難きを見るに堪へずして、地に俯伏し、敢て觀るを得ざりき。且上より證する声を聞けり、曰ふ、此れ我の至愛の子、人を救はん為に世に來りし者なり。

→通常部分 P13「シメオン祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 ^{けだし}蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神[°]に歸す、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

(アミンに続いて)

祭-5

祭日のトロパリ 3回

▽祭日経 P752/P724

第七調。

ハリストス神よ、爾は山に於て変容して、爾の門徒に其力に稱ひて爾の光榮を顕し給へり。願はくは生神女の祈祷に因りて、我等罪なる者にも爾の永在の光は輝かん。光を施す主よ、光榮は爾に歸す。三次 (樂譜はページ)

ハリストス かみよ なんじは 山において 変容して

なんじの 門徒に その ちからに かないて

なんじの 光栄を あらわしたまえり

願くは 生神女の祈禱によって 我等 罪なるものにも

なんじの 永在のひかりは かがやかん

光を施す主よ、光栄は なんじに 帰す

光栄は 「ハリストス神よ…」 繰り返す

今も 「ハリストス神よ…」 繰り返す

→通常部分 P14「願わくは主の名は崇めほめられ……」へ戻る。

早課

来たれ…、六段の聖詠、大連禱に続いて
＜カフィズマ、セダレンは省略＞

祭-6

主は神なり、祭日トロパリ

▽祭日経 P752/724

＜【主は神なり】日本では3回だが、本来は下記の句に続いて4回。第4句に続いてトロパリ。＞

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



輔祭の唱える句に続いて歌う。



ポリエレイに続いて

祭-7

【讃歌】（讃歌はロシア系のみの伝統なので祭日経には出ていない。▽[連接歌集 P342](#)）

（ズナメニイのメロディによる）

讃歌

いのちを たまう ハリス トス よ
われら なんじを 讃 揚 して
なんじが 最と いさぎよき 身の
神 妙なる 顕 えいを とお とー む

炉儀が終わるまで繰り返す。（3度とは限らない）

→[通常部分 P18](#) へ戻る

【小連祷】【アンティフォン】 4 調

祭-8

提綱、第四調。▽[祭日経 P754](#)

ファウォルとエルモンとは爾の名に因りて欣ぶ。句、天は爾に属し、地も爾に属す。

ボロキメン 4 調

ファオ ル と エルモンは なん じの名によりて よろこぶ

（そのまま続けて）

【福音の読み】

輔祭 主に祷らん、

（詠） 主、憐れめよ

司祭 （高声）蓋我が神や、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光栄を爾父と子と聖神に献ず、
今も何時も世世に、

（詠）「アミン」

輔祭 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 (句) 神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ、

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 凡そ呼吸ある者は

(詠) 凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ、(2回半)

輔祭 我等に聖福音經を聴くを賜うを主・神に祷らん、

(詠) 主憐めよ、3次

輔祭 睿智肅みて立て、聖福音經を聴くべし、

司祭 衆人に平安、

(詠) 爾の神にも、

司祭 ルカ伝の聖福音經の読み、

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

輔祭 謹みて聴くべし

ルカ 45 端。(司祭復活の福音經を誦す)

彼の時イイスス此等の言の後約八日を越えて、彼はペトル、イオアン、イアコフを攜へ、山に登りて祷れり。祷る時其面の容は變り、其衣は皎くして輝けり。視よ、二人の彼と語れるあり、即モイセイ及びイリヤなり、光榮の中に現れて、彼がイエルサリムに成すべき逝世の事を言へり。ペトル及び之と偕に在りし者は倦みて寝ねたり、既に寤めて、イイススの光榮、及び二人の彼と偕に立てるを見たり。其彼を離るる時、ペトル イイススに謂へり、夫子よ、我等此に居るは善し、我等三の廬を建てて、一は爾の爲、一はモイセイの爲、一はイリヤの爲にせん、自ら言ふ所を知らざりき。彼が尚之を言ふ時、雲ありて彼等を蓋へり、雲に入りし時、懼れたり。雲より聲ありて云ふ、此は我の至愛の子なり、彼に聽け。聲已に發して、イイススの獨在るを見たり。彼等默して、當時には見し事を誰にも告げざりき。

(詠) 主や、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す、

→通常部分 P18 へ戻る 【第 50 聖詠誦読】

祭-9

福音後のスティヒラ

▽祭日経 P755

光栄は父と子と 聖神に 帰す 今日万有は喜びに

満てられたり ハリストスは 門徒の前に 変容したまえり

いま もいつも 世 世にアミン 今日万有は喜びに

満てられたり ハリストスは 門徒の前に 変容したまえり

救世主よ、 爾は己の神性の微なるひかりを

爾とともに 山に登りしものにして 彼らを世に超ゆる 爾の

光栄のために 熱中する者と なしたまえり。 故に 彼らは

感動して 呼べり 我等ここに居るは 善しと 彼らとともに

我等も 爾 変容せし 救主 ハリストスを 世世に うた - - う。

(アミンに続けて)

祭-10

カノン

▽祭日経 P755～

カノンは1から第9歌頌で構成され(第2歌頌は省かれる)、各歌頌の第一トロパリをイルモスと呼ぶ。二つめ以降トロパリは附唱を前につけて(変容祭では「主や光栄は爾の聖なる変容に帰す」など)唱える。最後のトロパリの前には「光栄は」「今も」をつける。第3歌頌のあとは小連祷(セダレン省略)、第6歌頌の後は小連祷とコンダク(イコス省略)、第8歌頌のあとの「ヘルビムより尊く」は大祭では歌わない。(中小祭では歌う。)第9歌頌のあとは小連祷。

変容祭はカノンが二篇ある。ひとつはコスマ師の作、第四調。もうひとつはイオアン師の作、第八調。現状では第一のカノンのみ行っている。

附唱は特に記載がないので「主や光栄は爾の聖なる変容に帰す。」

聖コスマの規程、(4調宮廷オビホードの最も一般的で簡単なメロディに当てはめた。)

第一歌頌

【イルモス】 イズライリの会衆は／濡れざる足にて／紅の海の探處を濟り、／敵の騎兵軍将が其中に溺れたるを見て欣びて歌へり／、我が神に歌はん、／彼光栄を顕したればなり。

第1歌頌

イズライリの 会 衆 は 濡れざる 足 に て

くれない 紅の海のふかみを わ たり 敵の騎兵 軍 将 が

その中に 溺れたるを 見 て 喜びて うた えり

我が神 に う た わん 彼 光栄を あらわしたれば な り

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスは其友に神の國に於ける生命の言を告げ、邇づき難き光を放つ者として言へり、父を我の中に識りて、欣びて歌へ、我が神に歌はん、彼光栄を顕したればなり。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

汝等友たる門徒は異邦民の力を衣、其財貨に因りて榮を獲ん。蓋我が日よりも明に輝く者として現れん時、爾等光栄に満てられて、欣びて歌頌せん、我が神に歌はん、彼光栄を顕したればなり。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

今日ハリストスはファウォル山に輝きて、曾て約せし如く、神聖なる奥密の光の状を門徒に顕し給へり。彼等は光を放つ神性の輝煌に満てられて、欣びて歌へり、我が神に歌はん、彼光栄を顕したればなり。

第二の規程、第八調。

第一歌頌

イルモス、イズライリは乾ける地の如く水を過り、エギプトの禍を免れて?べり、我が救主及び神に歌はん。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

昔モイセイは預言者として、主の光栄を海と雲と火柱とに見てよべり、我が救主及び神に歌はん。

神を見しモイセイは、磐の形に於て、見えざる主を其受けたる肉體の覆の下に洞徹して、よべり、我が救主及び神に歌はん。

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

爾はモイセイに律法の山及びファウォル山に見られたり、昔は黑暗の中に於てし、今は神性の近づき難き光の中に於てせり。

共頌、「モイセイは杖を以て十字架の縦を象りて」。

第三歌頌

〔イルモス〕強き者の弓は弱み、弱れる者は力を帯びたり、故に我が心は主の中に堅められたり。



附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスよ、爾全きアダムを衣て、昔味みたる性を復明にし、爾の容の篇易を以て此を神成し給へり。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

昔火柱と雲とを以てイズライリを野に導きしハリストスは、今日ファウォル山に於て言ひ難く光の中に輝き給へり。

又

イルモス、主、天の穹蒼の至上なる造成者、教会の建立者、冀望の極、信者の固、獨人を愛する者よ、我を爾の愛に堅め給へ。

主宰よ、曩に幕を蔭ひ、又爾の僕モイセイに傳はりたる光栄は、爾がファウォル山に於て言ひ難く輝きし篇容の預象を為せり。

至上なる獨生の言、獨人を愛する主よ、爾と偕に使徒等の首たる者はファウォル山に登り、之と偕にモイセイとイリヤとは神の役者として前に立てり。

爾は神言にして全き人と為りて、爾の位の中に人性を完き神性と合せ給へり、故にモイセイとイリヤとはファウォル山に於て爾の位に二性あるを見たり。

【小連禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光荣の女宰・生^{しょうしんじょ}神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の生命^{いのち}を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に
司祭 (高声) 蓋爾は我等の神なり、我等光荣は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

坐誦讃詞、第四調。

イイススよ、爾はファウォル山にイアコフ、ペトル、イオアンと偕に在りて、睿智なるイリヤ及びモイセイの間に篇容し給へり。ペトルは共に在りて、斯く爾に言へり、此に三の庵を建つるは善し、一はモイセイの為、一はイリヤの為、一は爾主宰ハリストスの為なりと。其時彼等に光を輝かしし主よ、我等の霊を照し給へ。

第四歌頌

【イルモス】 ハリストス神よ、我爾の光荣なる摂理を聞けり、爾は童貞女より生れ給へり、主よ、光荣は爾の力に帰すと、呼ぶ者を迷より救はん為なり。

4歌頌



ハリストス か みよ 我 爾の光荣なる 摂理を 聞 けり
なんじは 童貞女より 生まれ たま えり
主よ光荣は爾に帰すと呼ぶものを 迷いより救 わん ため な り

附唱 主よ光荣は爾の聖なる変容に帰す

ハリストス神よ、爾はシナイ山に於て律法を文に録す時、雲と、火と黒暗と、烈風との中に現れ給へり。主よ、光荣は爾の力に帰す。

附唱 主よ光荣は爾の聖なる変容に帰す

ハリストス神よ、爾の光荣なる摂理を信ぜしめん為に、爾は世々の前より在し、雲に乗りて親ら升る者にして、言ひ難くファウォル山に輝き給へり。

附唱 主よ光荣は爾の聖なる変容に帰す

昔爾が火と、烟と、幽暗と、微なる風との中に與に語りし者等は今前に立ち、僕として爾主宰ハリスト

スと偕に語れり。主よ、光栄は爾の力に帰す。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ハリストスよ、昔火と棘との中に爾を預見せしモイセイ、又火の車を以て挙げられしイリヤは、ファウォル山に現れて、爾が十字架に於ける逝世の事を告げたり。

又

イルモス、爾の身より神性の光線は出でたり、故に預言者と使徒との首たる者は歌ひてべり、主よ、光栄は爾の力に帰す。

火に囲まれたる棘を損はれざる者として護りし主宰よ、爾は神性の光にて輝く肉體をモイセイに顕し給へり。故に彼は歌へり、主よ、光栄は爾の力に帰す。

我がイイススよ、物質の日は爾がファウォル山に篇容せしを見て、神性の光線の中に隠れたり。主よ、光栄は爾の力に帰す。

二性にして一なる主宰よ、爾がモイセイと、使徒等と、イリヤとに二の全き性を以て現れし時、肉體の物質を焚かざる無形の火は見られたり。

第五歌頌

【イルモス】 原始の光の輝を發きて、造物をして光の中に爾造物主を歌はしむるハリストスよ、爾の光の中に我等の途を向はしめ給へ。



附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスよ、時は爾の前に俯伏せり、蓋爾が人の容貌を篇ぜんと欲せし時、光と天を度る日の輝煌とは俄に爾の足下に顕れたり。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

モイセイと、イリヤとはファウォルの聖山に於て門徒に向ひて呼べり、視よ、救世主ハリストス、昔我等が眞の神として豫め傳へし者なり。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

死す可き性に體合せし変易せざる性は、無形の神性に属する光を顕して、使徒の前に言ひ難く輝けり。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

永遠の光なるハリストスよ、門徒は爾が父の光榮の内に輝けるを見て、爾によべり、爾の光の中に我等の途を向はしめ給へ。

又

イルモス、隠れざる光よ、何ぞ我を爾の顔より退けし、外の闇は憐なる我を掩へり。祈る、我を返して、我が途を爾の誠の光に向はしめ給へ。

能辯の舌は爾の威厳を述ぶる能はず、蓋爾生を有ち死を司る者は、ファウォル山に於て、モイセイとイリヤとを爾の神性を證する者と顕し給へり。

見えざる手にて人を己の像に循ひて造りしハリストスよ、爾は神及び人として、今此の造物の中に己の本體の美しきを顕ししこと、已に像を以するに非ず、即爾親ら其の實性を以て顕し給へり。

爾は己の中に神性と人性とを混淆なく合せて、我等にファウォル山ら於て神性の熾炭、諸罪を焚きて靈を照す者を顕し、此を以てモイセイとイリヤ、及び門徒の首たる者を驚かし給へり。

第六歌頌

【イルモス】我憂の時主によびしに、我が救の神は我に聴き給へり。救世主はファウォル山に於て日の光に超ゆる光を放ちて、我等を照したまえばなり。



附唱 主よ光榮は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスよ、爾はファウォル山に登りて容を変へ、凡の迷を昏まして我等を照し給へり。

附唱 光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ハリストスよ、光榮なる使徒等はファウォル山に於て爾が神たるを識りて、驚きて膝を曲めたり。

又

イルモス、救世主よ、我を浄め給へ、我が不法多ければなり、祈る、我を惡の淵より引き上げ給へ。我爾に呼びたればなり、吾が救の神よ、我に聴き給へ。

今日見られたる顕現は何ぞ其れ大にして懼るべき、天より物質の日、地より神° 靈の比なき義の日はファウォル山に輝けり。

モイセイはファウォルに爾の神性を見てよべり、律法の弱りたる影は去り、眞實なるハリストスは顕に來り給へり。

火柱は最明に変容せしハリストスを預象し、雲は頭にファウォルに蔭ひし聖神[°]の恩寵を預象せり。

【小連祷】

輔祭 我等安和にして主に祷らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に祷らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光荣の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に
司祭 (高声) 蓋爾は平安の王及び我が霊の救主なり、我等光荣は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

【小讃詞】第七調。(歌う、または誦読)

ハリストス神よ、爾が山に於て変容せし時、爾の門徒は容るるに稱ひて爾の光荣を見たり、此れ爾が十字架に釘せらるるを見て、苦の自由なるを悟り、爾が實に父の光なるを世界に傳へん為なり。



ハリストス か み よ なんじは 山において 変 容 せ し と き
なんじの 門 徒 は 容 る る に か な い て なんじの 光 榮 を 見 た り
こ れ なんじの 十 字 架 に 釘 せ ら る る を 見 て
苦 し み の 自 由 な る を さ と り なんじが じ つ に
父 の 光 榮 な る を 世 界 に 伝 え ん た め な り

【同讃詞】

我が霊の怠れる意念、絶えず下に地に傾ける者よ、起きて立ち、神聖なる上升の高きに登れ、我等ペトル及びゼワデイの子に趨り附きて、彼等と偕にファウォル山に至らん、彼等と偕に我が神の光荣を見、彼等が上より聞きし父の光を傳ふる声を聞かん為なり。

第七歌頌

〔イルモス〕 昔アウラアムの少者はワフィロンに於て爐の焰を踏みて、歌を以て呼べり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。



附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

使徒等はファウォル山に於て邇づき難き光栄の光に照されて、ハリストスによべり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスよ、使徒等は神聖なる声の響と露を出す雲と、爾の輝とに楽しませられて歌へり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

ハリストスよ、ペトルは、ファウォル山に於て爾が言ひ難き光の中に輝けるを見てよべり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

ゼウェデイの子は生命の首たるハリストスと偕に在りて、其面より光の発せし時よべり、我が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

又

イルモス、エウレイの少者は爐に在りて勇ましく焰を踏みて、火を露に変じてよべり、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

未だ見ざる事は今使徒等に顕れたり、是れ肉體の中に在る神性、ファウォル山に輝ける者なり。故に彼等よべり、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

驚き懼れたる使徒等はファウォル山に於て神の國の美しきを奇としてよべり、主神よ、爾は世々に崇め讃めらる。

未だ聞かざる事は今聞かれたり、蓋父なく童貞女より生れし子は、厳に父の声にて世々に神及び人なりと證せらる。

至上者の義子たるに非ず、即本性を以て原始より至愛の子たる者、爾は変易なく我等と偕に在せり。主よ、爾は世々に崇め讃めらる。

第八歌頌

〔イルモス〕 少者はワフィロンに於て神聖なる熱心に灼かれて、苛虐者と焰との嚇を勇ましく踐み、火の中に擲たれて、露に湿されて歌へり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

第8歌頌



附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

萬有を瞬にて保つハリストスは至浄なる足にて、ファウォル山に登り、彼處に其の顔にて日の光より明に輝き、律法と恩寵との首たる役者に歌はしめ給へり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

限られぬ暮れざる光なる父の輝は、邇づく可からざる光栄を以て、言ひ難くファウォル山に現れて、造物を照し、人々を神成し給へり。故に彼等歌ふ、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

敬みてファウォル山に立てるモイセイとイリヤとは、明に神の位たるハリストす、父の光栄にて輝ける者の容を覩て歌へり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

附唱 主よ光栄は爾の聖なる変容に帰す

昔モイセイの面は神が黒暗に現るるに因りて光栄を放てり、今ハリストスは光と光栄とを衣の如く衣る、蓋彼親ら光の造成主にして、主の悉くの造物は主を崇め讃めよと歌ふ者を照し給ふ。

附唱 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

門徒しハリストスがファウォル山に於て光を放てる雲に饒らるるを見て、地に俯伏し、智慧は照されて、彼を父及び聖神^oと偕に歌へり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

又

イルモス、ハルディヤの窘迫者は怒に堪へずして、敬虔の者の為に爐を七倍熱くしたれども上の力にて其救はれしを見て、造物主と救世主に呼べり、少者よ、崇め讃めよ、司祭よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

主宰よ、爾の門徒は父より證を聞き、爾の顔の光が人の目の力に超ゆるを以て、之を見るに堪へずして、地に俯伏し、畏懼を以て歌へり、司祭よ、崇め讃めよ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

爾は本性に因りて最美しき諸王の王、諸主の主、福たる主宰、邇づき難き光に居る者なり。驚ける門徒と、モイセイと、イリヤとは爾に呼べり、少者よ、崇め讃めよ、司祭よ、讃め歌へ、民よ、萬世に尊み崇めよ。

ハリストスよ、爾が天の主宰、地の王、地獄の主たるを以て、爾の前に地より使徒等、天よりするが如くフェスワのイリヤ、死よりモイセイは立ちて、声を合せて歌へり、民よ、萬世に尊み崇めよ。

人を愛する主よ、使徒等の選ばれたる者は憂を生ずる地の慮を棄てて、爾に従ひて、地より上なる神聖の度生を為せり。故に彼等は宜しきに合ひて爾の神現を見るを得て歌へり、民よ、彼を萬世に尊み崇めよ。

第九歌頌

※「ヘルウィムより尊く」は主日であっても歌わない。次の祭日の附唱とイルモスを歌う。

附唱 我が^{たましい}靈よ、ファオル山に光栄を顕しし主を讃め揚げよ。

[イルモス]生神女よ、爾の産は不朽なり、神は爾の腹より出で、地上に肉體ある者と現れて、人と偕に在せり、故に我等皆爾を崇め讃む。

附唱 我が たま しいや、 ファオル山 に お いて

光 栄 を あ ら わ し し 主 を 讃 め あ げ よ

第9歌頌

生 神 女 よ 爾 の 産 は 不 朽 な り 神 は 爾 の 腹 より 出 で

地 上 に 肉 体 あ る も の と 現 ら れ て 人 と と も に い ま せ り

故 に 我 等 み な な ん じ を あ が め 讃 む

(以下同様に歌う、または誦経)

附唱 我が靈よ、ファオル山に光栄を顕しし主を讃め揚げよ。

戦ける門徒等は俄に異常の光に照されて、互に見、驚きて地に俯伏し、爾萬有の主宰を拝めり。

奇蹟を確證する神聖なる声は雲より出でたり、蓋諸の光の父は使徒等に呼べり、此は私の至愛の子なり、

彼に聴け。

附唱 我が霊よ、ファオル山に光栄を顕しし主を讃め揚げよ。

異常にして至栄なる事を見し言の役者はファオル山に於て父の声を聴きて?べり、此の我が救世主は原像者の像なり。

附唱 我が霊よ、ファオル山に光栄を顕しし主を讃め揚げよ。

永在者の変らず動かざる像、変易せざる印、至上者の子と言、睿智と臂、右の手と力よ、我等父及び聖神[°]と偕に爾を崇め歌ふ。

又

イルモス、凡の者は神の言ひ難き寛容の事、如何に至上者が甘じて肉體を取るまでに降りて、童貞女の腹より人と為りしかを聞きて、恐れざるなし。故に我等信者は至浄なる生神女を崇め讃む。

ハリストスよ、爾の言ひ難き再度の降臨の事、如何に爾が至上の神、諸神の中に立つ者として顕れんとするかを明に示さん為に、爾は測り難くファウォルに於て使徒等と、モイセイと、イリヤとの前に輝き給へり。故に我等皆爾を崇め讃む。

諸民よ、我に聴きて来り、聖なる天上の山に登り、神[°] 霊を以て生活の神の城に立ち、智慧を以て父と聖神[°]との無形なる神性、獨生の子の中に輝ける者を仰ぐべし。

ハリストスよ、爾は慈を以て我を楽しませ、爾が神性の愛を以て我を変じ給へり。求む、仁慈の主よ、無形の火を以て我が罪を燐き、我を爾の中に在る全き福を受くるに堪ふる者と為し給へ、我が祝ひて爾の両度の降臨を崇め讃めん為なり。

【小連祷】

輔祭 我等安和にして主に祷らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に祷らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光栄の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の生命を以て、^{いのち}ハリストス神に委託せん、 (詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

※日曜日の場合には「主は神なり」を歌う。

【光耀歌】▽祭日経 P744

光なる生れざる父より生れたる変易なき光言よ、我等今日ファウォルに現れたる爾の光の中に父の光又聖神[°]の光、凡の造物を照して導く者を覩たり。三次。

祭 11

【讃揚歌とスティヒラ】 ▽祭日経 P768

4 調で「凡そ呼吸ある者」を歌う。



およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を
ほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ
ほめ歌は汝 かみに帰す そのことごとくの神使や
かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ
あげよ ほめ歌はなんじかみに帰す

(本来 148,149,150 聖詠誦読し、末尾にスティヒラを挿入するが、日本では通常省略され) そのまま
続けて生神女讃詞を歌う。

8調

光 栄は父と子と聖神に 帰すいまもいつも 世---世に アミン

ハリストスはペトル、イアコフ、及びイオアンを 携 さ え

一人彼らを ひ き いて たかき やまに の ぼ り

彼ら の まえ に かたちを変え た り その 面は

日の 如く か が や- き 其の衣は光の如く なれ- り

モイセイ及びイリヤ 現 われて 彼と偕に 語れ- り

光れる雲は かれらをお お い 且つ雲より声ありて言- う

此は我の至愛の子、我が喜べる者なり、 かれに 聴け

→通常部分 P22 に戻る 【大詠頌】を歌う

大頌栄、「聖なる神」を歌った後

祭 12

【祭日トロパリ】

ハリストス かみよ なんじは 山において 変容して
なんじの 門徒に その ちから に かないて
なんじの 光栄を あらわ したまえり
願くは 生神女の祈禱によって 我等 罪なるものにも
なんじの 永在のひかりは かがやかん
光を施す主よ、光栄は なんじに 帰す

→通常部分 P27 に戻る

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。発放詞。

一時課

＜一時課の変更箇所は、トロパリコンダクのみ＞

【トロパリ】第七調。

ハリストス神よ、爾は山に於て変容して、爾の門徒に其力に稱ひて爾の光栄を顕し給へり。願はくは生神女の祈禱に因りて、我等罪なる者にも爾の永在の光は輝かん。光を施す主よ、光栄は爾に帰す。

【コンダク】第七調。

ハリストス神よ、爾が山に於て変容せし時、爾の門徒は容るるに稱ひて爾の光栄を見たり、此れ爾が十字架に釘せらるるを見て、苦の自由なるを悟り、爾が實に父の光なるを世界に傳へん為なり。

※祈禱の最後に上記の「祭日トロパリ」を歌う場合もある。